新見公立短期大学紀要　第22巻
pp. 89－96, 2001

研究ノート

鳥取県西部地震による新見市千屋地区被災高齢者への支援活動の報告 その２　高齢者世帯への短大ボランティア訪問活動の実際と課題

金山　時恵　　古城　幸子　　土井　英子
木下　香織　　真壁　幸子

災害看護学

A Report on Support Activities for the Elderly Victims of Tottori West Earthquake at Chiya Area in Niimi City
2] Present Condition and Future Problem of Home Visits to the Elderly by Niimi College Volunteers

Tokie KANAYAMA　Sachiko KOJO　Hideko DOI
Kaori KINOSHITA　Sachiko MAKABE

(2001年11月１日受理)

鳥取県西部地震で被害を受けた新見市千屋地区の高齢者世帯へ、短大有志によるボランティアとして訪問活動を行なってきた。震災後１ヶ月目から開始した第１期、冬場の第２期、2001年５月からの第３期と継続し、既に一年を経過しようとしている。今回は、第３期前半の７月末現在までの活動を報告対象とし、その実際と課題について検討した。訪問時の活動は、主として健康観察、家事援助としての掃除、窓拭き、障子貼り等を行なってきた。いずれも、高齢で身体的障害のため、震災後の不安などで気力が低下している時等なかなか日常生活の中で行動に移せないことばかりで、大変喜んでいただいた。また、学生の訪問をとても楽しみにして下さり、学生にとっても役に立ったと思える援助ができボランティアの意義を十分理解することができた。今後も、訪問活動を継続するとともに、新見市生活福祉部および、社会福祉協議会との連携を図り、より組織的な活動となるよう努力したい。

はじめに

鳥取県西部地震における新見公立短期大学の取り組みについては、その１（古城他、2001）で述べたが、今回は、ボランティア活動の中心的な活動として行なってきた高齢者世帯への訪問活動について述べる。この訪問活動は震災後１ヶ月目から開始した第１期、冬場の第２期、2001年５月からの第３期と継続し現在に至っている。第３期は2002年３月までの予定であるが、今回は第３期前半の７月末現在までの活動を報告対象とし、その実際と課題を検討した。

第３期前半までの活動を総計すると訪問対象者数は９名であり、訪問回数は延べ40回、学生のボランティア動員数は延べ64名、教員の動員数は延べ55名であった。

Ⅰ．ボランティア活動の概況

１．高齢者世帯訪問ボランティアの目的

活動の目的を以下のように設定した。それぞれの時期に立案した目的をそのままの表現で示すと

以下の通りである。第１期は支援の必要性の有無を把握することが大きな目的であったが、第２期では生活支援の可能性が明らかになったため、出来るだけ役に立ちたいという思いをもって訪問を行なった。第３期では精神面へのサポートの重要性を感じて、より深まった関係性の中で継続している。目的の表現から、その活動の進展が見える。

〈第１期〉

千屋地区被災高齢者世帯への訪問を通して、看護職の私たちに役立つことがあるかどうかを把握し、できることをささやかでもサポートしていく。

〈第２期〉

新見公立短期大学の学生および教職員によるボランティア活動として、2000年10月の鳥取県西部地震において、阿新地域でもっとも被害の大きかった千屋地区住民への生活支援を行うことを目的とする。

〈第３期〉

千屋地区の被災高齢者の独居世帯、高齢者夫婦世帯を訪問し、健康状態のチェック及び日常生活の援助を行いながら、主として精神面へのサポートを行い、震災後の不安の軽減を図る。

２．高齢者世帯訪問ボランティアの概要

千屋地区の訪問対象は新見市社会福祉協議会からの紹介を得て、対象者の承諾の基に訪問を開始した。対象世帯は第１期から第３期まで合計９件で、表１のとおりである。

第１期は2000年11月７日から11月13日の間に５件の対象世帯を訪問した（表２）。訪問回数は１件に１～３回実施した。訪問スタッフは看護学科３年次学生２～３名と看護学科教員１～２名でチームを組んだ。援助内容は健康観察、身体的ケア、家事援助で訪問世帯の希望に添って援助した。

第２期は翌2001年２月17日から４月６日までで、対象は第１期の訪問世帯３件に加え、新たに社会福祉協議会より３件の訪問依頼があり、計６

表１．高齢者世帯訪問対象者

訪問世帯	家族構成	援助内容	実施時期
A	高齢者夫婦２人暮らし 妻は寝たきり状態 夫が主たる介護者	妻の健康観察・身体的ケア 夫への介護相談	Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期
B	高齢者夫婦と母親の３人暮らし 母親は虚弱高齢者 妻は膝関節痛のため家事不自由	夫婦の健康観察・家事援助	Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期
C	高齢男性の１人暮らし	家事援助	Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期
D	高齢女性の１人暮らし	様子伺い	Ⅰ期・Ⅱ期
E	高齢夫婦の２人暮らし 夫は寝たきり状態 妻が主たる介護者	夫婦の健康観察・身体的ケア 妻の介護相談	Ⅰ期
F	高齢者夫婦の２人暮らし 夫は身体不自由 妻は主たる介護者	夫婦の健康観察 妻の介護相談	Ⅱ期
G	三世代世帯	身体的介護	Ⅱ期
H	高齢女性の１人暮らし	健康観察・家事援助	Ⅲ期
I	高齢女性の１人暮らし	健康観察・家事援助	Ⅲ期

件を対象としたが、うち１件は依頼後訪問予定の前に入院されたため中止となり実質５件を訪問した（表３）。訪問回数は１件について２～３回であった。スタッフは看護学科１年次生と２年次生が２～３名と教員が１～２名でチームを組んだ。春休みに入ると教員のみの訪問も加えた。援助内容は電話連絡を含んで、第１期と同様の健康観察、身体的ケア、家事援助であった。

第３期は５月10日から翌年３月までの期間を予定しているが、前半は７月25日までであった。訪問対象は第１期・第２期と継続している３件と、新たに２件を加えた計５件である（表４）。このうち１件は、本学のボランティア活動の情報を聞いて自主的に訪問依頼をされた方であった。１件に２～６回の訪問を行った。スタッフは看護学科３年次生２～３名と看護学科教員１名のチームを組んだ。夏期休業に入ると、教員２名のチームで実施した。援助内容は第１期・第２期と同様であった。

II．高齢者世帯訪問の実際

第１期・第２期・第３期と継続訪問した３世帯を紹介し、活動の実際を述べる。

１．訪問世帯Ａ

76歳の妻と、80歳の夫と２人暮らし。妻は、脳梗塞後遺症で寝たきり状態であり、主たる介護を夫が担っている。妻は、発語は見られないが声に反応し意志疎通が図られている。痰が多く自力の喀出が不充分なため常に吸引が必要である。皮膚状態はよく、発赤など見られない。経管栄養を施行しており、日常生活動作全てにおいて全介助で

表２．高齢者世帯訪問活動〈第１期〉

訪問世帯		A	B	C	D	E
1回目	実施日	11月7日（火）	11月9日（木）	11月7日（火）	11月7日（火）	11月9日（木）
	学生	門田・利根(看3)	米井・三井・門田・利根(看3)	米井・長谷川(看3)	門田・利根(看3)	米井・三井(看3)
	教員	金山	古城・金山	古城	金山	古城
	時間	14～15	13：00～15：00	13：30～15：25	15：00	11：00～12：00
	内容	血圧測定・体位変換	ガラス拭き・掃除	掃除・洗濯・布団干し	様子伺い	血圧測定・マッサージ
2回目	実施日	11月9日（木）	11月13日(月)	11月9日（木）		11月13日(月)
	学生	門田・利根(看3)	門田(看3)	米井・三井(看3)		三井・近藤(看3)
	教員	金山	金山	古城		古城
	時間	10：00～12：00	13：00～15：30	10：00～10：50		14：00～15：30
	内容	血圧測定・散髪・おしめ交換	障子貼り	洗濯・布団干し		(ヘルパーと同行)血圧測定・清拭・手浴・足浴
3回目	実施日	11月13日(月)		11月13日(月)		
	学生	門田(看3)		三井・近藤(看3)		
	教員	金山		古城		
	時間	10：00～12：00		11：00～13：50		
	内容	(ヘルパーと同行) 清拭・洗髪 爪きり・足浴・手浴		昼食作り・障子貼り・掃除		

ある。

夫は、肩、膝等の痛みがある。介護疲れも窺われるが「元気なうちは、妻を看てやりたい」という想いが強い。そのため、夫は在宅での介護に対して積極的に対応している。排便後は、ペットボトルを利用して洗浄をしたり、吸引器を２台設置する等様々な工夫を凝らしながら手厚い介護が行なわれている。また、カレンダーには朝・昼・夕の体温と、便の回数、その日の様子など細かく記入されている。夫は、妻のベットの傍らに自分のベットを置き、終日そばで見守っている。

週１回の往診と、週２回のホームヘルパーによる清拭、洗髪など行なわれている。市の補助で、浴室の改修を行い玄関にスロープを設置し、妻の入浴を行なっている。

〈活動の実際〉

地震直後、夫婦は家の倒壊の危険を感じて、自家用車の中で１日過ごし、翌日ホームヘルパーから避難所となっていた公民館への避難誘導がなされた。その間、夫は妻の吸引が心配で仕方なかった。揺れはひどかったものの、家が損壊することはなかった。家に帰ってからも、国道沿いの家で大型トラックなどの往来で家は揺れ続け、また、余震が断続的に続いたりして安心して休むことは出来なかった。我々の訪問時には、特に具体的な援助の希望はなかったが、妻の健康観察を行い異常の早期発見に努めた。さらに清拭、散髪等保清を行なった。また、夫に対しては健康観察と、不安なことなど話をゆっくり聞き、介護相談を行なった。

表３．高齢者世帯訪問活動〈第２期〉

訪問世帯		A	B	C	D	F
1回目	実施日	2月17日（土）	2月17日（土）	2月24日（土）	2月24日（土）	2月24日（土）
	学生	鈴木・木原・宮崎（看１）	鈴木・木原・宮崎（看１）			芋谷・室井（看２）
	教員	金山・土井	金山・土井			古城・真壁
	時間	AM11：00	PM13:00			13:30～15:00
	内容	健康観察,散髪	健康観察,掃除	電話：親戚の法事と重なり、訪問は中止し、後日の約束をする。健康上の問題はないとの事。	電話：当日介護者の交代で、後日にしてほしいとの事。入浴時などに貧血で倒れることがあり心配と娘の話。	血圧測定、・リハビリ、食事指導
2回目	実施日	3月3日（土）	3月26日（月）	3月10日（土）	3月3日（土）	3月24日（土）
	学生	鈴木・木原・宮崎（看１）		芋谷・室井（看２）	鈴木・木原・宮崎（看１）	
	教員	金山・土井	金山・木下	古城・真壁	金山・土井	古城・木下
	時間	10：30～11：00	AM10：30	AM	11：00～11：45	
	内容	健康観察	健康観察，窓拭き、掃除	雪かき・畳敷き・掃除	血圧測定	食事メニューの配布３月26日「いきいき長寿あしんの味」を届けた
3回目	実施日		4月6日（金）			
	学生		坂林・宮成(看３)			
	教員		金山・木下			
	時間		AM10：30,			
	内容		健康観察窓拭き、掃除			

第２期では、第１期同様の援助を行なった。居室には、保温のために内側からもカーテンが張られており、またストーブ１つで暖がとられていた。雪と寒さのため、特に何をするということも

表４．高齢者世帯訪問活動〈第３期・前半〉

対象世帯		A	B	C	H	I
1回目	実施日	5月10日（木）	5月10日（木）	5月22日（火）	5月10日（木）	5月17日（木）
	学生	古賀・白石(看３)	垂井・田正司・西(看３)	浅野・伊郷・林(看３)	古賀・白石(看３)	氷室・平川(看３)
	教員	金山	木下	金山	金山	金山
	時間	10:45～11:30	13:30～15:45	13:00～15:40	11:40～50	10:00～12:00
	内容	健康観察・吸引 ＊自宅のお風呂に入れたい。（15日くらいに予定）	窓拭き、掃除 健康観察 備北民報取材あり	健康観察・ 掃除前日まで腹痛で３日間食べれず点滴施行 RSK取材有り	今後の訪問について確認	窓拭き、健康観察 山陽新聞取材あり
2回目	実施日	5月24日（木）	5月24日（木）	7月25日（水）	5月17日（木）	5月24日（木）
	学生	芋谷・室井(看３)	芋谷・室井(看３)			上野・岡川・山本(看３)
	教員	金山	金山	木下・真壁		金山
	時間	14:00～15:00	15:00～16:30	10:00～11:30		10:30～12:00
	内容	インタビュー 26日（土）の往診で、バルン抜去予定。入浴はまだしていない。	インタビュー 特に変わり無し。	健康観察・掃除 布団干し	実母のお見舞いのため中止	掃除
3回目	実施日	7月25日（水）	5月31日（木）		6月14日（木）	6月5日（火）
	学生		野田・曽我(看３)		実母逝去のため中止	加門・駒居(看３)
	教員	土井・金山	金山			金山
	時間	10:00～10:30	10:30～12:30			13:30～16:00
	内容	健康観察	健康観察、掃除 朝日新聞、市報取材あり			健康観察、掃除 市報取材あり
4回目	実施日		6月28日（木）		7月25日（水）	6月21日（木）
	学生		細川・松崎(看３)			塩満・幡司(看３)
	教員		金山		土井・金山	金山
	時間		10:00～11:30			10:30～12:30
			健康察、掃除、爪きり		ヘルパー訪問中	健康観察、掃除
5回目	実施日		7月25日（水）			6月28日（木）
	学生					芋谷・室井(看３)
	教員		木下・真壁			金山
	時間		13:00～15:30			10:00～11:30
	内容		健康観察・掃除			インタビュー 書類の書き方
6回目	実施日					7月25日（水）
	学生					
	教員					土井・金山
	時間					10:45～12:30
	内容					健康観察・掃除

なく妻とともに休めるときに身体を休めているといった状態であった。

第３期では、妻のバルンカテーテルが抜去されたことと、市の補助で浴室の改修、玄関のスロープの設置がなされたことにより、夫の念願であった入浴介助がホームヘルパーとともに行なわれるようになった。

この世帯は、妻が寝たきりで夫が介護者であり、妻の介護は夫の務めとして、甲斐甲斐しく行なわれている。夫の介護には看護者として本当に頭の下がる思いがした。また、夫の介護に対する考え方や思いを聞くことは、夫の介護を支持し自信を持つことにつながると実感し、また、看護者としてのあり方を振り返るような貴重な体験であった。夫の介護に対して自信を持ってもらったり、足りない部分を補ったり、また不安に感じておられることを解決したりする等の精神的支援を今後も心がけていく必要がある。

また、単調な生活になりがちだが、学生たちの訪問は夫婦にとって刺激となり喜んで受け入れてもらっている。特に何をしてほしいといわれることはないが、支援されているという安心感を与えられる存在の一つとして今後も訪問を継続していく必要性を感じている。

２．訪問世帯Ｂ

77歳の夫と74歳の妻と98歳の夫の母の３人暮らし。

98歳の対象は、日常生活動作はほぼ自立しており、何をするということなく臥床されていることが多い。2001年３月、トイレ移動中に転倒し大腿骨頸部骨折で入院、その後老人保健施設へ入所中である。

夫は、高所から転落し頭部打撲の後遺症で思うように言葉が出ないことをひどく気にされている。しかし、身体が不自由な妻に代わって家事全般を行い、畑仕事に従事している。近所の信頼も厚く訪問者も多い。

妻は、膝関節痛で室内外は杖使用。立位困難なため、家事全般は夫に任せている。週１回、義母が入所している施設のデイケアに通っており、通所の度、98歳の義母に面会している。

週末には、長男が市内から帰って来て田畑の仕事に従事している。また、週１回、ホームヘルパー訪問により、主として台所周りの家事援助が行なわれている。

〈活動の実際〉

200年以上続く家屋は地震で損壊することはなかったが、根太がガタガタで足を踏み入れることができなかった。また、襖やガラス戸の開け閉てができにくくなり、障子は破れたままであった。長屋は倒壊の恐れがあったため数日間かけて家財道具や骨董品などをボランティアの方々によって小屋へ運んでもらった。ボランティアの応援は大変心強かったが、長屋が壊されるのはいとおしい感じがしたとも話される。近くに住む息子がたびたび帰り修復してくれたようだ。訪問時の希望は、掃除を主にしてほしいということで窓拭きなどの家事援助を中心に行なった。障子貼りも行なった。また、話好きな夫婦の話を聞いたり、健康観察を行なった。

第２期では、以前から長男が整理しておいた材木で根太の修理が行なわれ、畳も新調され掃除を行なった。空いたところだけしてくれたらよいということで、整理整頓の必要性を感じつつも一度には出来ないもどかしさを感じた。

第３期では、１期、２期同様の家事援助と健康観察を中心に継続している。

この世帯は、高齢者３人暮らしで、お互いの不足部分を補いながら生活を維持されている。身体が不自由な妻を助けて、夫が家事全般を援助され、お互いをとても大切に思われており、夫婦のあり方について学ぶことが多い。

週末には、長男が帰って来て家のことをされており、嬉しい様子が伺える。

また、学生の訪問をいつも楽しみにされており、話題も豊富で笑いが絶えない。

身体的支援はもちろん、不安なことや困難なことを少しでも解消できるよう精神的支援を継続していく必要がある。

３．訪問世帯Ｃ

85歳男性の一人暮らし。膝関節痛、腰痛などあるが、日常生活動作は自立している。バイクで近

所に買い物や畑仕事に出かける。出来た野菜などを娘家族に送ることが楽しみの一つである。近くの友人と、たびたび温泉に行くことが多く、またそれが楽しみとなっている。週1回は、近くの診療所に受診、月1回デイサービスと、時折ふれあいサロンにも顔を出している。週1回、ホームヘルパーの訪問があり、主として掃除の家事援助が行なわれている。

〈活動の実際〉

地震直後は井戸水が出にくく、第1期の訪問時にもまだ水量は地震前よりは少ないということだった。家が損壊することはなかったが、襖やガラス戸の開け閉てができにくくなっており、縁側のガラスは壊れ、障子は短冊状に破れたままとなっており、地震による揺れの大きさがうかがわれた。震災時の様子を伺うと、食器棚の食器が飛び出して、壊れたものが多かったようだ。その後一人でそれらを片付けられたのだと考えると、切ない思いがした。

訪問時の希望は、膝の痛みのため大きな物の洗濯がし難いということで、シーツの洗濯や布団干しを行う等の、家事援助を中心に行なった。また、これからの冬に備えて、障子貼りを行なった。

第2期では、布団干しや掃除のほか、家の外にある便所は雪の上を歩かなければならないため、転倒などの危険を考え雪かきを行なった。この訪問時には雪の下が氷になっている状態であった。また、風邪をひいて5日間寝込んでいたため、ほとんど食事らしい食事が出来ていなかったと、やややつれた顔色であった。その後、市の補助で根太の修理が行なわれ、その後の畳を上げたままの状態であったため、畳を敷き掃除を行なった。

第3期の訪問時には、作り置きの食事を食べて腹痛を起こし、3日間何も食べれず点滴治療を受けた病後であった。布団干しなどの家事援助は継続している。

この対象者の支援の課題は、男性高齢者の一人暮らしであり、身体的には自立されており、バイクを利用して近所へ買い物には行けるが、高齢であることから事故の危険性が大きいことである。買い物などの家事援助はホームヘルパーに依頼するように助言することも必要になろう。また、食事が最も大きな課題である。作るのも食べるのも億劫になり、体力が落ちて風邪を引きやすくなったり、また、食事の作り置きを食べて腹痛を起こしたりと、現実的な問題が起きている。しかし、食事面の家事援助に関しては、「たくさん作ってもらっても、食べきれない」ということから、ホームヘルパーにも依頼されていない。そのため健康観察、栄養や水分の摂取について話をし、間接的な援助を行なうことが必要である。

一方で学生の訪問を楽しみにされており、話が尽きない。言葉にはされないが、一人暮らしの淋しさも伺え、話を聞くことが精神的支援と思われ、訪問を継続していく必要性がある。時にはお弁当持参で一緒に昼食を囲む計画を考えても良いだろう。

Ⅲ．今後の課題

震災後1ヶ月後より、高齢者世帯への訪問ボランティア活動を開始し、現在も継続して行なっている。活動開始当初は、生活面での復興の絶ち遅れを痛感した。訪問するたび、被災状況のひどさを目にするとともに、不安な声が多く聞かれた。しかし、時間の経過とともに建物の修復・改築も済み、訪問対象者の方々もまた落ち着いた表情が見え、少しづつ落ち着きを取り戻されていることが伺える。

対象者の望まれる活動として、健康観察はもちろん家事援助としての掃除、窓拭き、障子貼りなど行ってきた。いずれも、高齢で身体的障害のため、また震災後の不安等で気力が低下している時等からなかなか行動に移せないことばかりなので大変喜んでいただいたと思う。

また、2週間に1回程度の訪問ではあったが、学生の訪問をとても楽しみしていただいた。学生の明るい笑顔や楽しい笑い声が、高齢者世帯の淋しさを軽減し、それが精神面へのサポートになり得ていると考える。話をすること、笑うことが大きな精神的支援の一つであると考える。学生にとっても、震災時の様子を伺うことで図り知れない不安を共有するとともに、対象者の役に立つ援

助を行なうことでボランティアの意義を十分理解することができたと考える。

この活動は、「支えられている安心を保障する」「少しの変化、異常に対応する」ことを目指して行っているが、その点においては十分果たすものであったと考える。

今後も、訪問活動を継続するとともに、新見市生活福祉部および、社会福祉協議会との連携を図り、より組織的な活動となるよう努力していきたいと考える。

参考文献

1）　中野智津子他：仮設住宅における看護活動，神戸市看護大学短期大学部，1999.

2）　南　裕子他：仮設住宅看護活動　報告書，平成8年度・平成9年度，兵庫県立看護大学，1997．1998.